

# 英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 59 No. 3 2007

主幹 佐野 正之

## 巻頭言

### 読み物教材のリサイクル

埼玉大学教授 ● 眞尾 正博

過日の新聞記事に、「大学入試過去問題の大学間での共有化(リサイクル?)」らしき内容の記事が掲載されていました。そのとき思ったのは、入試問題作成時の材料さがしに使うエネルギーが、教科書作成時の過程に似ているなということでした。と同時に、教科書出版各社もそれぞれの副読本としての「リーディング教材」を作成していますが、暗いニュースがテレビから流れることが多くなった今日この頃を考えると、英語学習の「心から感動する読み物教材」の共有化、つまり過去の教科書の題材の中で、人気のあった「読み物教材」の共有化はできないものかということでした。当然、利益追求の各民間会社ではありますが、共通の目的は健全な日本人の育成に貢献することであるのは間違いのないと思いました。

附属幼稚園(現：園長兼務)のクリスマス会で、オスカー・ワイルドの『幸せの王子』のアニメを園児に見せる場面がありました。体のサイズこそ小さいですが、心は私たち大人と同じ「小さな人格者」たちが感動している姿には驚きました。人を思いやる心の育成はあらゆる教科を通してできるわけですが、特に諸々の条件制約により、英語の教科書では十分に盛り込めないのも現実です。ある高校「リーディング」教科書の作成に参加していたときのこと、過去の名作を中心に作られた立派な教科書も売れ行きが当初は伸び悩みでした。理由は、使用する先生方の興味は、科学もの・環境問題・実用英語などで、学習者の心を感動させる文学作品のような内容にはないとのことでした(現在の大学、一般教養科目の英語もそうらしいです)。

「教養 vs. 実用」の話題がいつの世にも出現し、特に最近では実用面が強調されがちですが、例えば、“what to speak” vs. “how to speak” の2つの視点から考えても、whatの面がいかに大切かを再考してみたいものです。また、現場では、授業時数、購入予算、生徒への学習負担、コピーの著作権法違反問題など、課題はいろいろありますが、「心を育てる教材」の利用方法、「ゆっくり考えさせる時間」の確保について再考したいものです。それ以前に、まず先生方に「何事にも感動する心」「知的好奇心」の復活を再考していただきたい。

## ディクトグロス

岡山大学教授 高塚 成信



### 1. はじめに

ライティングと言うとすぐに、スピーキングの場合と同様に、「自分の考えや気持ち」などを表現することと考えられがちですが、教科書を使った毎時間の授業の中で教師が用意すべき活動の一つは、生徒が本文などを「聞いたり読んだりしたことについてメモ」を取り、それに基づいて本文を復元して書く作業であると思います。

これは、「ディクトグロス(dictogloss)」と呼ばれる活動ですが、既に多くの中学校や高等学校において英語授業における重要な活動の一つとして位置づけて実践されており(例えば、高知県立高知南中学校、岡山県立倉敷南高等学校)、ライティング力を初めとする英語能力伸長における効果が実証されつつあります。以下にその具体的内容についてご紹介したいと思います。

### 2. ディクトグロス

‘Dictogloss’は、‘dictation’と‘gloss’(「解説、パラフレーズ」)を合成した造語ですが、「文章復元練習」の訳語を与えている辞書(『ジーニアス英和大辞典』)もあるように、基本的には、短い文章が読まれるのをメモを取りながら聞いて、その後、理解した意味とメモに基づいて、聞いた文章を友だちと相談しながら協力して復元して書く活動です。

文章には学習目標とする文法項目が埋め込まれており、「文法ディクテーション」という名で呼ばれることもあります。

### 3. ディクトグロスの段階

ディクトグロスは通常、次の4つの段階で行われますが、最初と最後の段階は省略することも可能です。

#### (1) Preparation(一斉)

音声を提示する前に、文章が扱っているトピック

クやキーワードについて説明することによって、スキーマを活性化し、聞くことの準備をします。

#### (2) Dictation(一斉)

音声を自然なスピードで提示します。1回目は全体の意味理解を中心に、2回目は重要だと思ふ語句を中心にメモを取るように指示します。

#### (3) Reconstruction(ペア・グループ)

次に、メモを持ち寄り、ペア・グループで相談しながら協力して、元の文章を復元する活動に移ります。その際、英語使用を原則とし、例えば、“I think I heard ... Am I right?”などとやり取りすることをうながします。

#### (4) Feedback(一斉)

ペア・グループで復元したものを全体に提示して、ほかのペア・グループが作成したものと比較します。最終的には、元の文章を文字で提示して比較します。

### 4. ディクトグロスの特徴と効用

ディクトグロスには、言語習得をうながすとされる重要な要素が多く組み込まれています。

#### (1) Input-based output

アウトプット(ここでは書くこと)に先立って、その基礎となるインプット(ここでは音声)が与えられています。また、アウトプットを行うことを通して、インプットの理解だけでは十分になされない文法の意識化がうながされます。

#### (2) Skill integration

リスニングやメモ、ライティングなど複数の技能を「総合的、有機的に関連付けた」活動になっており、現実の言語使用場面で要求される言語処理の練習を行うことができます。

#### (3) Noticing

聞き取りや話し合いを通して、生徒は新しい言語項目に気づいたり(noticing a form)、自分の言語知識の欠落に気づいたり(noticing a hole)、さら

には自分が復元した文章と元の文章との違いに気づいたりします(noticing the gap)。これらの気づきは言語習得上、たいへん重要なものとされています。

#### (4) Collaboration

学習に関する社会文化理論によると、私たちの学習は一人で成立するのではなく、自分より多くの知識・技能を持った人と一緒に行う活動の中で形成されるとされます。この活動において生徒は、お互いから学び合う機会が与えられています。

#### (5) Paraphrasing

この活動では、正確なディクテーションは求められていません。重要だと思ふ語句をメモするだけです。ですから、当然のことながら、理解した意味を再度言語化する際には、使用されていた語句を一部借用しながらも、自分自身の言葉で言い換えることが必要になります。

言い換えは、コミュニケーションの様々な場面(例えば、理解した内容を確認する、反論の前に相手の主張をまとめる)で必要となる、とても大切な技能です。

### 5. ディクトグロスの留意点

#### (1) Text length/difficulty

生徒が内容を理解し、部分的にでもメモが取れる程度のレベルの短い文章を選ぶ必要があります。しかし、あとで述べますように、読解後の活動として行う場合には少し難しいものや長いものでも使用可能になります。

#### (2) Dictation speed

文章を読み上げるスピードは遅すぎないように注意します。そうでないと、全部書き取るのだという誤ったメッセージを生徒に伝えてしまいます。

#### (3) Availability of input

ディクトグロスを行ううえでの最も大きな心配は、ペア・グループでの協同作業の中で、正しい言語形式がやり取りされる保証がないことです。

それを回避するには、ペア・グループ活動中に元の文章と同じ文法項目を含む例文を参照できるようにすること、辞書・参考書などの使用を許可すること、教師が「言語インフォメーション・デ

スク」を開設し相談に応じること、などの手だてを講じる必要があります。

また必要に応じて、活動のあとに特定の文法項目について明示的な指導をすることも有効です。

### 6. ディクトグロスのバリエーション

ディクトグロスでは、基本的には初めて聞く文章が用いられますが、難しいと感じる場合には、post-reading taskとして、音読や読解による意味理解を終えた教科書本文の一部を音声提示することもできます。

また、メモに基づくペア・グループでの協同作業では英語を使用するのが原則ですが、日本語でもよいとすることも可能です。

さらには、‘dictation’という名称とは懸け離れてしまっていますが、メモを取りながら読んだあとで、文章を復元する活動に進むこともできます。

### 7. おわりに

以上のように、ディクトグロスは、言語習得にとって不可欠な要素をいくつも内在した活動であり、難易度の調整も容易で、中学1年生の学習初期からでも、短い時間でも行うことができる活動であることがおわかりいただけたと思います。

また、ディクトグロスでの書く活動は、「自分の考えや気持ち」をまとめて書くという典型的なライティングとは異なってはいますが、復元して書いたものに「自分の考えや気持ち」を加えて書く活動に発展させることは容易です。

次の授業から、5分間でもいいですから、毎時間行うルーティーンの活動として加えてみてはいかがでしょうか。

#### 参考文献

- Nabei, T. (1996). Dictogloss: Is it an effective language learning task? *Working Papers in Educational Linguistics* 12, 1, 59-74.
- Wajnryb, R. (1988). The dictogloss method of language teaching: A text-based, communicative approach to grammar. *English Teaching Forum* July, 35-38.
- Wajnryb, R. (1990). *Grammar Dictation*. Oxford: Oxford University Press.

英語を通じて世界で起きていることに目を向けてみよう

～2年生2学期のプロジェクト 英語を実質的な行動につなげる～

東京都板橋区立高島第三中学校教諭 矢木 美記子



1. はじめに

英語の教科書は題材が豊富である。世界各国の紹介のみならず、偉大な人物の話であったり、地雷や原爆等のテーマにもおよんでいる。生徒には日頃から英語は単なるツールであり、それを使って何を学ぶか、どう行動するかを考えていける人になってほしいと伝えてきている。そして題材に合ったビデオを見せたり、外部の人材を呼んだりして普段知りえない世界を英語を通して紹介してきた。そこで、中学2年生の2学期、ALTとの週1時間の授業で「世界に目を向けてみよう」ということでグループごとのプロジェクトに取り組んだ。

2. 日頃の授業

英語が比較的得意な生徒をクラスの半分選び、ペアリーダーに指名し、机を隣り合わせて座るペア学習を取り入れている。日頃からお互いに教え合う雰囲気ができている。ライティングに関しては、ほぼ毎単元「自己表現」の時間を取り、新しい文法を使い、自分で文章を作らせている。時間のある生徒にはイラストも描かせ英語科通信“English House”に載せることで、意欲も高まり、ほぼ全員が時間内に書けるようになってきた。



英語科通信 English House

英語科通信は題材の補足説明や文法事項のまとめなどに使っている。授業中に行った自己表現を

載せる際には、なるべく多くの生徒の作品を載せるようにしている。生徒は配られるとうれしそうに読んでいる。

3. プロジェクトの進め方

(1) Refugeeについて

ALTとのTTで世界で起きている問題について生徒に問いかけ、主にRefugeeについて考えさせた。自分が今すぐその立場になったら、家からまず何を持っていくか、遊び道具が何もない状態で木の枝や石を実際に使ってどんな遊びが考えられるかという授業をした。

(2) Group決め、テーマ決め

日頃のペアは別れないという約束で、最大3ペアまで一緒にグループを作ってよいことにした。最小で4人、最大で6人のグループを作り、テーマを考えさせた。各グループのテーマの例としてはGlobal Warming, Animal Extinction, Refugee Kids, War などがあつた。さらにグループ内でそのテーマについて「どんな問題なのか?」「なぜそれが起こるのか?」「その解決方法は?(個人レベル, 世界レベル)」と細かく取り組む内容を分担させた。

(3) PC室で調べ学習

各クラス1時間ずつ、パソコン室で自分のテーマをインターネットで調べさせた。必要であれば、図や絵も取り出し、模造紙に貼れるようにした。個人的に家で調べてきた生徒もいた。

(4) 下書き

下書き用のプリントを渡し、書きたい内容をまとめ、和英辞書やALTの力を借りながら、なるべく習った英語での英作文に取りかかった。説明が難しいものに関しては、絵や図を使って工夫するようにながした。

(5) 模造紙に本書き

グループごとにイラストや図をまじえながら模

造紙にまとめさせた。

(6) 発表1

クラスごとに発表会を行った。発表用の原稿も作らせて各班で発表させ、聞いている生徒には評価も書かせた。

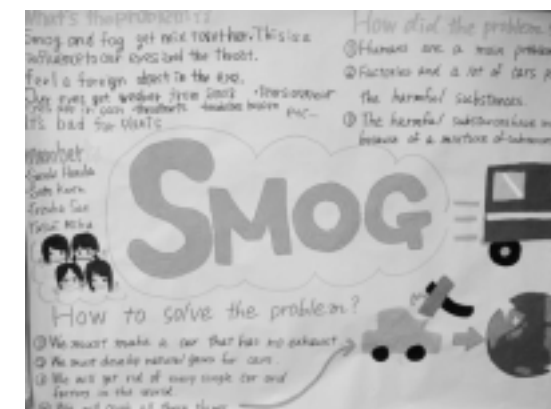
生徒の感想

- ・このプロジェクトをやって、最初は調べて書いて発表だけだと思っていたけれど、作業をしているうちに本当に募金が集まってくればよいと強く思いました。
- ・難しく今まで聞いたこともない単語がたくさんあり、本当に最後まできちんとできるかなという不安がありました。でも先生や友だちのおかげで最後までやりきることができました。文章を作るときは辞書で調べては書き、最初は単語が並んだものでしたが、いろいろと書き直していくうちに最終的にはわかりやすい文章ができてよかったと思います。今回のことでいろいろな単語や文の構成も理解できたり、発音の練習もできたので、よかったです。今回のことを生かしていきたいと思いました。
- ・最初はわからないことばかりだったけど、調べていくうちにだんだんとわかるようになりまとめるのが大変でした。自分の考えもしっかり書けたし、読めたのでよかったです。
- ・今回調べて、自分が知っていることはまだまだだと思いました。このような目的を決めて調べるのは、自分の知らないことを知るチャンスだと思います。絵を入れてわかりやすく書いているので、募金する人がたくさんいるといいなと思います。また英語でやることで新しい単語も覚えることができました。

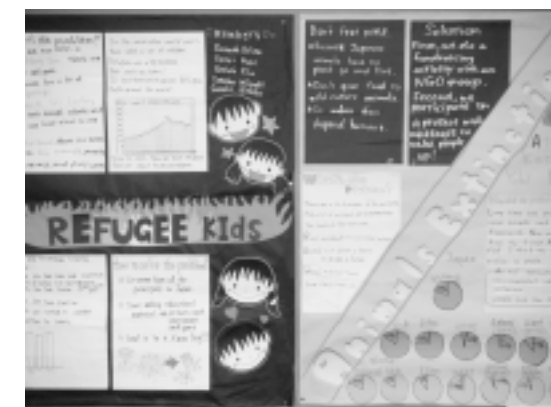
(7) 発表2

今回のプロジェクトにおいて、私とALTの大きな目的であった「実質的な活動につなげる」という意味で、昨年11月の創造祭(合唱コンクール)の際に受付の近くにパネルを置き、募金を行った。それは R.I.ジャパン(国際難民奉仕会)を通して、生徒が取り上げた諸問題に関係するNGOへの募金とした。また3月の作品展示会でも全グループ分を展示し、募金を行った。R.I.ジャパンからはお

札の手紙も来るため、生徒にとっては自分たちの学習の意義が改めて感じられたようである。



排気ガスについて



写真左: 難民の子どもたちの現状について

写真右: 動物絶滅についてグラフを使ってわかりやすく仕上げている。このテーマにはほかにも数班が取り組んでいた。

4. おわりに

現在扱っている教科書の最後のレッスンにちょうど“There are many ways to help people, aren't there?”というセリフがあり、「まさにみんなの活動も many ways の一つだね」と生徒に伝えた。その後3学期の終わりのほうに、“We Are the World”や地雷に関する日本のアーティストの行動を紹介したが、生徒はとても真剣に授業に臨んでおり、彼らの考え方や姿勢の成長を感じた。今回のプロジェクトでは生徒にとって英語の必要性を感じさせたり、英語を通して自分たちができるとのイメージを膨らませたりすることができたように思う。3年生になったら、さらに発展的な課題に取り組んでいきたいと考えている。

## 英文日記で “話せる”, “書ける”, “聞ける”!

静岡県御殿場市立富士岡中学校教諭 皆本 孝幸



### 1. はじめに

「書く」という作業は、英語技能を身につけるうえで、非常に大切なものである。また、実践的なコミュニケーション能力を育成するうえで、書く作業は、文法能力、語法能力、語彙、表現技能(スピーチ・会話にもつながる)など、多くの実践的な力を磨くことができる。書く作業は、学び、練習し、発信するという最後の段階である。しかし、これを初期の段階から行えば、生徒がより表出活動に早い時期から取り組むことになる。ライティングは、スピーチにもつながる有効な活動なのである。

### 2. 英文日記指導

私は英語教師になってから、継続して生徒たちに「英文日記」を課題としてきた。そのきっかけとなったのは、多くの英語の先生方が、1日1ページの単語練習を課題としていたことにある。

生徒たちに正直な感想を聞くと、「無味乾燥でつまらない」「機械的で、やったあともページは増えるがよく覚えていない」「スペルはわかるが、意味を忘れる」など、あまり評判はよくなかった。私はそういう生徒たちの生の声を聞き、それでは、英語教師と生徒一人ひとりが常にコンタクトをとることができ、交流もできる、しかも、使う意図がはっきりしている「英文日記」を始めることにした。教科を通した生徒指導にも有効であると考えた。

中学1年生から和英辞典を購入させ、または学校の辞書を貸し出し、簡単な和英辞典の入った副教材も購入する。そして、まずは授業で習った単語を使って文章を作成させていく。1年生で一般動詞を学習したあと、生徒たちの英文日記は一気に内容が豊かになる。部活動が終了したあと、生徒が書いた英文日記をじっくり読むのが英語教師として無上の喜びである。

3年間持ち上がったたり、3年生を担当したときなど、生徒の英文発信力は、飛躍的に向上する。飛び込みで3年生に入ったときなども、4月より全員にノートを購入させ、英文日記を書かせていくのである。最初はいやがる生徒もいるが、英語教師としての熱い気持ちをぶつける。卒業する頃になると、その日記を大切な思い出としてくれる生徒もいて、うれしい限りである。また、英語検定や高校入学試験の英作文について、子どもたちが自信を持っていくのである。以下、具体的な実践内容を紹介したい。

#### (1) 教師の熱い思い

授業開きの際、「英語を書く」ことが、どんなに価値があって、楽しくかつ力がつくかなどの熱い思いをぶつける。そして、英語教師として、みんなの英文日記には、きっちりと二日おきに返事を書くことを約束する。

#### (2) ノートの選択

子どもたちには、英文日記のノートを自由に選択させる。華やかなキャラクターのノート、ブランドのノートなど、高価なノートを買ってくる生徒もいる。ノートの選択によって子どもたちにやる気が生まれ、自分の好きなノートを使うことで、続けようという気持ちが生まれる。

#### (3) 二日おきの返事

英語教師のためにも英文日記は役に立つ。私は子どもたちの英文日記への返事に、かなり高度な内容の返事を書くようにしている。その理由は、「子どもたちが、興味を持ってその内容を知ろうとして、辞書を自分から引いて調べる習慣が身につく」からである。

また、英語教師自身の英語力向上にも役に立つ。私はこの20年間で、大学時代と同じくらい自らの英語力は向上したと考える。それは、教師が200人の生徒に返事を書くには、それなりの英語力の維持が必要となるためである。私はこの英文日記を

通して、自らの英語能力を磨くことができた。

#### (4) 読む力との相関

生徒たちは、私の返事を読むことで、読む力も向上させることができる。辞書を引きながら私の英文を読み、授業で学んだ構文を使いながら、私に対して返事を書く。英語の得意な子は多くの返事をくれる。しかし、そうでない子は、単語だけの羅列もあるし、わずかな単語の子もいる。しかし、私が書いた返事には何が書いてあるのか気になるらしく、どの子も真剣に辞書を引き読み読んでいた。

#### (5) 強要しないルール

英文日記は、強要せず、評価にも入れない。そうすることによって、生徒もストレスを感じることなく、本当の自分を日記にさらけ出すことができる。英語教師と生徒の関わりが深まれば、ノートを通して英語の多くの情報や、好きな人のこと、部活の悩みなどを、英語を通して表現できるようになる。また、私の書いた文章を模して作文していくなど、自然体で長く続けることができるのである。

#### (6) プラス1のルール

「昨日の文章(あるいは単語)に加えて、1つの英文(あるいは単語)を書いていこう」というプラス1のルールで文章を増やしていく。これによって、自分で英語を増やしていくことができ、自分が使いたい語彙を選ぶことができる。そして自分の使いたい語句は興味を持っているので、定着するのが確実であると生徒自身が実感できるのである。

#### (7) たくさん書かせるには

子どもたちの返事に対して、私の考えを書き、私が再び生徒たちに質問をするという形式をとることにより、生徒は何を書こうか悩む必要がなくなっている。常に教師の気持ちを伝え、生徒の文章や使うことができた単語を褒め、また生徒に質問していくという循環が、たくさん、長く書かせるコツのように感じられる。

### 3. 成果

#### (1) 話す力に結びつく

英文日記を続けていくと、自分の言いたいことを英語で表現できる。特に、スピーチや会話表現に自分の書いた英語が生きてくるように感じる。子どもたちは、自分が作文した表現を使いながら、ALTと会話をするときの大きな参考になったと言っている。特に過去形を用いて自分のことを表現したり、自分自身のことを表現したりする能力を高めた。

#### (2) 辞書活用

英文日記のメリットは、子どもたちが英語入門期から辞書に親しむようになることである。日記を書くとき、私からの返事を読むときなど、辞書は必需品である。その際、生徒たちは、ほかの単語も目にするため、若い彼らには辞書を早いうちから活用させることが有効であると考えられる。

#### (3) 書かせたあとの活動

スピーチで、自分の書いた文章を音声として伝えさせたい。みんなの前でしっかりと自分の意見を言わせる。比較的長く文章を書けるようになった生徒には、テーマを与えて英文を書かせ、それを授業の最初にスピーチさせている。これがなかなか好評で、英文日記を見ながら発表する生徒もいれば、暗唱する生徒もいて、スピーチにつなげるよい活動だと感じている。

### 4. 課題

強要しないことで、30パーセントの生徒たちが、何とか英文日記を継続できている。驚いたことに、実践していくと、成績が下位の生徒や上位の生徒は比較的よく提出する。中の下くらいの生徒がなかなか毎日提出できない。そこが今後の課題であろう。

以上が私の20年間の英作文実践である。今後は、書いたことを口頭作文につなげるために、授業での活動をより深めなければならないと痛感している。



## 教科書とのつきあい方



広島大学教授 深澤 清治

## 1. はじめに

英語ブームの中、ちまたの書店の英語教材コーナーには国際的な英語能力試験対策のマニュアル本や、新感覚の語彙・文法学習参考書、英語学習マニュアル本が所狭しと並んでいる。そんな中、日本人にとって外国語であり、教科としての英語教育場面では、教科書はこれまで同様、これからも主たる教材であり続けるであろう。ただし、英語教科書に期待される役割は、以前とは変わってきているように思われる。教科書の役割を再考しながら、今後どのように教科書とつきあっていけばいいのか考えてみたい。

## 2. 批判する側から批判される側に

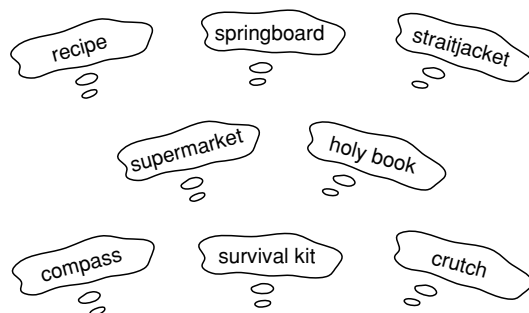
私自身、教科書作りに参加するようになったのは17年前であった。当初は高等学校英語教科書、英語Ⅰ、英語Ⅱの担当で、初めて関わったPHOENIXはその名もむなしく(?)改名となり、現在はほかの教科書の担当になっている。想像以上にいろいろな制約があることに戸惑いながら、教科書作りに携わることで、いわば英語教科書を批判する側から批判される側に攻守が代わってみて、いくつか自分の中に意識の変化が生まれてきた。それと同時に、教科書とのつきあい方も変わってきたような気がする。

まず、文部科学省に対する批判を逃げ道にすることはやめたいと考えようになった。確かに、語彙制限など言語材料の量的な制約に対して不満はあるとしても、それを乗り切るだけの英語のセンスや豊かな知識・常識、幅広い情報検索・活用能力を、果たして自分自身が持ち合わせているのか、と自問し挫折することばかりであった。また、教科書の英語について、「英米人はこう言わない」とか「不自然な英語である」という指摘を聞いたたびに、執筆段階でアメリカ人とイギリス人のインフォーマントによってかなり違った見解をもらったことを思い出した。「ある一人の」英語母語話者が言ったことから、教科書すべてをダメ出しでき

るのかという疑問が生まれた。さらに、教科書の内容は古いという指摘もかなりある。時事的話題やスポーツや芸術の分野で世界を舞台に活躍するトップ・プレーヤーの話は、確かにメディアの英語ならばリアルタイムで目にし、耳にすることができる。しかし、印刷媒体としての教科書は、執筆に1年、検定・修正で1年、宣伝・採択で1年、結局、教科書として先生方や生徒の手に届くまでに3、4年経っていることを考えると、内容の鮮度が落ちているのは仕方ないと言わざるを得ない。このような教科書の宿命とも言えることに何度となく気づかされた。では、その宿命を背負った教科書とどのように向き合っていけばいいのだろうか。

## 3. 教科書をたとえると?

これを読んでくださっている先生方にとって、教科書はどのような存在であろうか。「教科書(coursebook)とは?」という質問に対して、次に示す8つのキーワードから最も当てはまるものを選んでみていただきたい。



(McGrath, 2002, p.8)

それぞれのたとえは何を意味するのであろうか。たとえば、レシピとしての教科書はどんな存在であろうか。これらの中で、先生自身が最も共感を覚えるたとえはどれですか。また、このほかにも何かたとえがありますか。

これらのたとえは、教科書はユーザーを「コントロールするもの」とする考え方と、逆にユーザーが「選択するもの」とする考え方の2つのグル

ープに分けられる。その中間に「サポートするもの」という考え方もくるはずである。その見方は、それぞれの先生方の考え方や置かれた環境や状況によって決まってくるものであろう。たとえば、教科書をholy bookと見るならば、決してその内容を疑うことは許されない存在となり、まさに「教科書を教える」ことを絶対視することになる。疑ってはならない存在としての教科書は、ただひたすらページ順にこなし、「何にも足さない、何にも引かない」ことが前提であり、創造的に使うことを許さないであろう。

これに対して、スーパーマーケットとしての教科書は、教えるための材料を見つけるための一つの選択肢とする考え方である。よくcoursebookに対して、sourcebookと呼ばれることもある。日本では検定教科書を使うことになっているので、複数の教科書を使うことはあまり一般的ではないが、学校によっては2種類以上の教科書を使い分けたり、いろいろな投げ込み教材と合わせて使われたりしている例も多い。

参考のために各国の教科書制度を紹介すると、使用する教科書を誰が決定するか、またどのような選択肢があるのか、によって次の5つの制度に大別される。(1) 国定制。中国や旧ソ連、韓国、北朝鮮、メキシコなど。(2) 検定制。日本、旧西ドイツ、スペイン、タイなど。(3) 認定制。フランス、カナダなど。公権力の介入は極めてゆるやかである。(4) 選定制。米国の約半分の州に見られるように州が教科書一覧表を作ってその中から各校に選ばせる。(5) 自由発行・選択制。先進自由諸国の多くが採用する。教科書の自由発行を認め、社会の良識を前提に各校(および担当教師)の自由採択に任せる。(別枝篤彦『世界の教科書は日本をどう教えているか』白水社 1992 参照)

## 4. 教科書使用についての賛否両論

日本も諸外国のように自由発行・自由選択制に移行したほうがよい、と考えている先生も当然おられるであろう。また、教科書があるから自由な英語教育ができない、さらに教科書なんかいらぬ、と言われる先生もあるかもしれない。教科書が必要かという賛否の議論は、教師と生徒の立場から次のようにまとめられる。

## 〈賛成派〉

## 教師と生徒にとってのメリット

- ・教科書は地図のように既習と未習を示し学習上の指標となる
- ・言語サンプルを与える
- ・バラエティを与える

## 生徒にとってのメリット

- ・何を学ぶか、何がテストされるかを示す
- ・習ったことを強化し、準備や予習を助ける

## 教師にとってのメリット

- ・すべて手作りするよりも時間の節約ができる
- ・言語、文化、指導法のサポートとなる
- ・カバーしたところを示す(説明責任において)

## 〈反対派〉

- ・一つの教科書のみ頼りすぎると教師の自由な教材開発力、授業構成力を弱める(de-skilling)
- ・教師に教科書という道具だけを使用する技師(technician)の役割を押しつけてしまう
- ・いろいろな地域・状況や、すべての生徒のニーズに合った教材はない

近年では、教えるのではなく学習を促進するのであるから「学習材」と呼ぶ傾向もある。結局、完全な教科書などなく、教科書の善し悪しを決めるのは、教科書そのものの素材としての良さに加えて、その教科書とどうつきあうかによるのではないだろうか。

## 5. おわりに

教科書とのつきあい方と題して、思いを述べさせていただいた。教科書のユーザーとして、あるいは制作者として、または評論家として、教科書との関わり方もいろいろである。英語教育の良きパートナーとして、英語という言語文化の豊かな素材、かつ活動メニューとして「教師を助ける」ことに加えて、その教科書を使うを通して、先生方がプロとしてさらにグレードアップされる機会とヒントを提供し「教師を育てる」こと、さらに元氣とやる気を与えて「生徒を育てる」ことができるような教科書、教材が私の理想である。

## 参考文献

McGrath, I. (2002). *Materials Evaluation and Design for Language Teaching*. Edinburgh University Press.



## 英語教師として最近感じていること

宮城県仙台市立西多賀中学校教諭 柏 眞一郎



### 1. はじめに

現在、公立中学校の英語教師をしている。高校を卒業するまで、外国人と話したことがなく、大学1年生のとき、初めて英会話の授業を受けた。外国人の先生に指名されて、ときどきしながら小さな声で答えたことを覚えている。そのとき初めて、英語がコミュニケーションの手段であるということを実感した。英語の上手な同級生がいて、少しでも近づきたいと思い、英語学習に真剣に取り組むことを決意した。それ以来、職場の同僚、研修やサークルで一緒になった方々から刺激を受けながら英語学習を続けてきた。

### 2. 英語学習として取り組んでいること

最近、本を読んだり、映画やDVDを見たりして英語学習を楽しんでいる。シャーロック・ホームズの洋書と翻訳を両方購入し、訳が難しい部分をそれぞれの本を使って確認しながら読んでいる。小学生の頃によく読んだ小説であるが、その当時とは違う目的と方法で読んでいる。以前テレビで放映されていた『刑事コロンボ』が好きで、DVDをよく見ている。せりふの中の表現を覚え、実際に使ってみようとしている。

また、英会話のサークルにも時々参加して、興味のある話題について、スピーチの原稿を書いて発表している。スピーチの原稿を考えるのは楽しいが、ネイティブスピーカーにわかりやすく話すのは難しい。音読練習の不足から、原稿に頼って読んでしまうことが多い。

以前は、読書や会話を通して、大切だと思ったことをインプットすることで満足していた。しかし最近では、自分の考えをアウトプットして、周囲の方から意見や感想を聞いて少しずつ修正していく大切さを実感できるようになってきた。様々な話題に興味をもち、自分のアイデアを少しでも付け加えて話したり書いたりする習慣を大切にしていきたいと感じている。

### 3. 英語科教員のワークショップへの参加

昨年、地元の出身大学で行われた英語科教員のワークショップに参加した。英語運用能力を高める英語指導の方法や、ライティングなどの技能を高める具体的な学習方法について学んだ。認知心理学の視点から、小学校での英語指導における課題について考えることや、日本語で、英語を支えるロジックとコミュニケーション・スキルを身につけることの必要性について学ぶこともでき、たいへん有意義な研修であった。

そのワークショップにおいて、大学時代、初めて受けた英会話の授業を担当していた先生の講義を久しぶりに受けることができた。授業を理解して楽しむことができ、英語学習を続けてきて本当によかった、と心から思うことができた。

### 4. 授業の中で目指したいこと

英語を話すときに、「話題に関する情報や経験」、「伝えるために必要な語い」、そして「相手に気持ちが伝わるように話す練習」の不足を感じる人が多い。ふだんの授業において、聞き手として「話の内容に関して質問することができる力」を、話し手として「自分の気持ちや考えを伝えるために、いろいろな表現を使ってわかりやすく説明できる力」を生徒に身につけさせたい、と考えている。

教科書とともに和英辞典や英英辞典を使って教材研究を深め、日頃から、生徒が様々な話題について英語で書いたり話したりできるように工夫したい。そして自分の意図を明確に伝えるために、母語としての日本語、外国語としての英語を効果的に使うコミュニケーション・スキルを身につけさせる方法について研修を深めたい。

### 5. おわりに

ALTや外国人との交流を通し、物事の見方や考え方は一つではないということを教わってきた。より広い視野でいろいろなことを考えさせてくれる英語学習を今後も地道に続けていきたい。



## 推測力の向上を意図した授業の工夫

群馬県沼田市教育委員会指導主事 金井 幸光



### 1. はじめに

以前、教育に関するある講演会で、確かな学力を身につけさせるための方法論に関する話題があり、「推論と発見」のサイクルを授業の中に取り入れることが重要な要素であるということを目にした。「なるほど」と感じ入り、「具体的にはこんなことかな」などと想像を働かせてみたが、数学や理科などはそのサイクルを具体化した授業が比較的容易にイメージできたが、自分自身が教えている英語の授業の中に「推論と発見」のサイクルを取り入れることは、意外と難しいと感じた。個人的には「英語は技能教科の色彩が強いのではないか」と思っているので、Practice makes perfect.の発想が思考を占拠し、なかなか「推論と発見」を具体化した授業が思い浮かばなかった。ただ、私自身、授業の中で「英文の意味を推測することは大切だよ」と生徒によく言っていたので、その辺りのことを半ば強引に「推論」と考え、中学3年生を受け持っていた1年間、「英文の意味を把握するうえでの推測力の向上」を意図した授業を工夫してみた。

### 2. 具体的実践

推測力向上を意図して具体的に継続実践したのは、「教科書本文の内容把握」の段階である。listeningによる教科書の内容把握を年間を通して行う中で推測力を意識的に磨いていく工夫を講じた。以下にその実践の概略を記す。

#### (1) 「推測することの重要性」の意識化

同じことを行う場合でも、生徒のやる気や知的好奇心を喚起したうえで行うのと、そうでない場合では、効果は当然変わってくる。「私たち日本人が日本語の文章の内容を把握するときですら、実は、推測力をふんだんに駆使して大意を得ていることが多い。英語も同じ。"I like English, but ..."ときたら、『でも、うまく話せない』と続くのかな、とか、『でも、兄は好きではない』という流れかな、などと推測しようとするのがすごく大

切」。こんな類の話を、折に触れ生徒に行い、「英語に関する推測力に磨きをかける」ことの重要性やおもしろさを、明確に意識させた。

#### (2) 3つの段階を設定しての推測力向上

##### ①何も情報がない難易度 高の段階

まず最初に行うのがこの段階。New wordsの確認もないまま、教科書本文をALTやJTEが2回音読し、その内容を推測させた。推測した内容は簡単にメモ書きさせた。無作為に数名指名し、推測した内容の一部を発表させた。

##### ②New words 確認後の難易度 中の段階

①の活動後、New wordsの意味や発音を確認した。その後、再び教科書本文を2回音読し、内容の推測を深めさせメモ書きさせた。この段階でも無作為に数名指名し、推測した内容の一部を発表させた。

##### ③Listening points を明示する難易度 低の段階

最後は、Listening pointsをいくつか明示したうえで、音読を2回行った。True or False形式などにし、難易度を低めて、①や②で難しさを感じていた生徒も、内容を推測できるよう配慮した。

#### (3) 推測したことと現実との整合性の確認

このlisteningのあと、文字情報を見ながらのreadingも行ったうえで、最終的には完全な英文の意味をしっかりと確認させた。この最終確認では、自らが行った推測と実際の本文内容との整合性、距離感をしっかりと確認することで、「発見」が行われるようにし、推測力が洗練されるようにした。この作業は、推測力の向上に極めて重要であると思われる。

### 3. おわりに

1年を終え、生徒に授業の感想を書いてもらったが、なかなか好評であった。統計的に証明はできないが、教えていた中での感触から、推測力向上に効果があったのではないかと感じられる。

これからも、生徒のためになる指導を、微力ながらいろいろと工夫していきたい。

### 1. はじめに

週3時間の授業で英語ができるようにするためには次の3つのどれも欠かせないと私は考えている。それは、①生徒の活動量を確保する、②自学の力をつけてやる、③ペア学習を推進する、である。

### 2. 活動量の確保

週にたった3時間しかない授業である。1単位時間の間中、生徒の目、耳、口、頭、手がフル回転する授業を目指したい。

そのためには授業の流れのパターンをいくつか絞って、生徒に流れがわかるようにしてやる必要がある。ある活動から次の活動へ移るときに、次に何をやるのか生徒がわかっていれば無駄な私語による時間の空費は減るだろう。

また同じ活動をするのでも、ちょっとした工夫で活動量が倍になったり3倍になったりする。例えば新出語句をCDのあとについてリピートする場合は、「2回、できれば3回くり返しなさい」と言う。CD教材の中にはポーズが長いものがあるが、そんなときでもダレずに緊張感を持ってスピード感とリズム感のある活動を保つことができる。

タイマーは英語教師の必需品である。活動をするときに時間設定をして、だらだらとさせない。「この活動には何分必要？」と、生徒に必要な最低限の時間を考えさせて活動を始めさせるとよい。昨年度の本校の3年生は、タイマーを自分たちでセットして、授業の最初の活動を私が教室に行く前に(チャイムの前に!)終わらせていた。

また、前回(『英語教育 2007年第1号』)も書いたが、早く終わった生徒には次の課題を与える(例:ペアワークが早く終わったら、今、自分や相手が言った文をノートに書かせる)。このように「できる生徒をさらに伸ばす」ことが大事である。

### 3. 自学の力

家庭学習(宿題)の内容を固定化する。本校の場合、毎時間の宿題は次のようになる。

#### 1年生

①ビンゴを2回分書いてくる。

②教科書の音読を25回以上(5回音読したら☆を1つ教科書の余白に書く。☆は最低5つ以上)。  
③音読した教科書本文に相当するワークブックの該当ページをやる。

#### 2年生

①1年生の内容に加えてdictationの練習をしてくる。  
②次のセクションに相当するSpiral Worksheet (Sunshine English Courseでは『スパイラル学習ワークシート』)をやる。

#### 3年生

①ワークブック  
②Spiral Worksheet  
宿題は、1年生のうちはなるべく授業の最後の数分を使ってやらせることにしている。当然、全部終わるわけではないが、「ちょっとやらせて家に帰す」のがコツである。生徒はやり始めたものはやり終えたがるものだから、家に帰ってすぐに取りかかる。またslow learnersの指導もその数分でできる。

2, 3年生は、このほかに自学用のノートを2冊持っている。既習の単語は、カテゴリー別にVocabulary Notebookに、ペアワークなどで口頭で言った文はWriting Notebookに書くことになっている。3年生になると、全員2,200文を達成する。

### 4. ペア学習

本校では、スタディ・ペアというペアを作っている。英語の得意な生徒と不得意な生徒がペアを組む。組み方は1年生は男女ペアで、2年生以上は誰と組んでもよい。普段のペアワークはもちろん、スキットなどのパフォーマンス活動もこのペアで行い、成績にもつながるようになっていく。個人の作業でも、自分が終わったらパートナーの手伝い、パートナーも終わったらどちらも終わっていないペアの手伝い、というようにサブティーチャーをどんどん増やしていく。全体の底上げができる。また、生徒の人間関係構築にも有効である。

## 第55回 中村英語教育賞入選論文発表

第1位：該当者なし

第2位：Is Dictation Effective in Developing Second Language Learners' Listening Skills and Vocabulary?: An Action Research Report

神奈川県立有馬高等学校 甲斐 順

第3位：読解プロセスの理解と読解ストラテジーの使用を促す指導

北海道札幌工業高等学校 松本 広幸

### ◆ 審査員 ◆

佐野 正之(審査委員長・横浜国立大学名誉教授)

和田 稔(同副委員長・明海大学教授)

松本 青也(愛知淑徳大学教授)

山岡俊比古(兵庫教育大学教授)

萬谷 隆一(北海道教育大学教授)

## 論文審査にあたって

審査委員長 佐野 正之

今回で実に55回を数える、全国的に知名度の高い伝統ある「中村英語教育賞」に、合わせて10件の労作が寄せられ、審査員一同非常に嬉しく審査にあたることができましたことをご報告し、厚くお礼申し上げます。

自由題を含めて4種類の課題に対して、中学校教諭2名、高等学校教諭8名のご応募をいただきました。どの論文も力作揃いで、審査は難航いたしました。最終的には、上位2点を選出することができました。

審査にあたりましては、5名の審査員が慎重に審査し、その結果を踏まえて総合的な観点から委員長と副委員長との間で最終審査を行いました。その結果、上記2点の入選作を決定いたしました。審査基準につきましては、従来からの5つの観点、独創性・発想力、内容の充実度、構成力、表現力、応用性・実用性から審査を行いました。

入選作の論文紹介・講評などについては次号に掲載いたします。ご期待ください。

## 大学はRemedial?

私が高校の教壇から大学の教壇に移ったのが今から四半世紀前のこと。大学の、しかも外国語学部の英米語学科、ましてや4年生、しかもあることか、英作文の担当ということで、最初はそれなりの下準備と緊張感をもって臨んだ。しかし、何回か授業を重ねるうちに、敵の実力がそれまで教えていた高校生と変わらぬことが判り、いつしか緊張感も萎え、気がついてみると高校と大差のない授業内容になっていた。

そして、いつの頃からか、クラスの大半が高校生以下の実力という時代になった。超エリート校はいざ知らず、いまや、大学生の多くが有り得ないシタックスの「英文」を有り得ない綴りで書く。語彙数の少なさは想像を絶する。しかも、日本語の訳語を与えても、その日本語を知らない。suggestを「示唆する」と言っても、何も示唆しない。definitionの訳語の『「定義」って何ですか?』と真顔で問う学生も現れた。「そうだな、『定義とは…』というのが『定義』じゃないかな」と応える。日本を代表する私立大学ですら、英語の平均的な実力は英検2級レベルだそうだ。ほかは推して知るべし。

私が所属する学会仲間の酒宴の席などでは、もっぱら〈あんなことも知らない、こんなことも知らない〉大学生に遭遇した話が座を盛り上げる。その話を聞いていた、ある有名私立中学の英語の先生が言う。「冗談でしょ、それじゃ、うちよりひどいじゃないですか」ある大学の先生がすかさず応じる。「そうだよ、be動詞の『過去形』だなんて言ったって無駄だから、『昔のことを言うときには、isはwasになります』と説明する先生だっているんだ。」

そんなわけで、いわゆる一般教養のテキストは高校の検定教科書よりもやさしくなった。大きな活字、大きな写真やイラストの薄っぺらいものになった。進む量が1講義でせいぜい見開き2ページくらい。しかも、週1回の授業。効果など期待できようもない。内容的には、以前のような文学作品は敬遠され、主流は「実用英語」である。と

言っても、高校のOral Communicationの焼き直し程度。外部の資格試験や検定試験対策を「実用」「実践」の名のもと、カリキュラムに入れ込んでいる大学もあるが、学生の基礎力がないから効果が出ない。一方、学生は電子辞書持参。指されて初めて辞書を叩く。スクロールが面倒だから第一義しか見ない。結果、General MacArthurを「一般的な」マッカーサー、と訳す有様。

少子化による全入時代。高校も大学も推薦。ペーパー試験を受けずに大学まで進める。つまりは、入試によって守られてきた英語力の基準がなくなった。どこかで歯止めをかけないと、いくら小学校から英語を教えようが、コミュニケーション重視の授業を行おうが、大学でまた、初歩的な「実用英語」でお茶を濁すことになる。

今の自分の授業は恥ずかしくて、とても部外者には見せられない、とは某大学英語教師の言葉。痩せても枯れても相手は大学生、プライドだけは傷つけてはならない。予習をしていないからと叱責するわけにもいかない。学生による「授業評価」がある。ボーナス査定に響く。こんな理不尽がまかり通るのが、今のホスピタリティ産業化された大学。Customers are always right.ならぬ、Students are always right.である。よって、「教育」は存在しない。そこで、「わからなくても仕方ないんだよ、君たちが悪いわけじゃないんだから」と優しく慰めながら、不定詞の三用法の例文なんかを板書する。それも、筆記体で書くと授業評価で「字が汚い」と批判されるので、ブロック体でできるだけ大きく丁寧に書く。そんな姿は、もちろん見られたくない。

(明海大学教授 小林 健)

### 投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、9月、2008年1月、3月、5月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を呈いたします。